

オーストラリアへの旅

花尾省治

東南アジアの諸国は赤道の南北 20 度以内に挟まれており、しかも豊かな雨と強い日光に恵ぐまれているので緑したたる木と草がよく茂っている。

『フィリピン』

フィリピンは豪亜地中海の東の入口にあたり、太平洋をこのフィリピンの島でさえぎっている。この国の面積は 29 万 9,000 平方kmで人口 1,900 万余りで 7,000 に及ぶ大小様々の島からできている。その中で最大の島がルソンとミンダナオの 2 つの島である。



フィリピンは多くの島が集ってできている関係、島と島との交通も少く統一した国でなかったためスペインにたやすく征服された歴史をもっている。日本と同じように山が多く耕地に恵まれず耕地は全面積の 12%を占めるに過ぎない。

フィリピンの農業の主なるものを挙げると、サトウキビ、タバコ、アバカ、米等である。

サトウキビはフィリピンの西部と北西の島々でよくつくられる。これはこの地帯が最もサトウキビに適しているからである。丁度植付の時に雨がよく降り、収穫の時によく乾燥する。乾季に糖分が茎の中によく貯えられるので立派なサトウキビができることになる。フィリピンはジャワと共に世界の砂

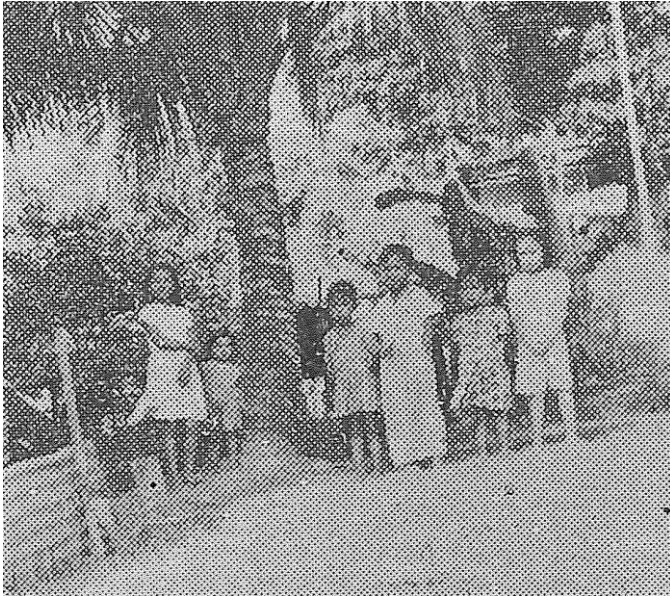
糖輸出国の一つとなっている。

アバカは砂糖キビの反対の気候のところを好みルソン島、ミンダナオ島の太平洋岸に多くつくられ、アバカ栽培の開発には日本人の力によったものといわれ、戦時中まで日本人のアバカ農園が多くあった。この繊維でつくられたのが所謂マニラ麻で天然繊維中で最も強く良質のロープ船具の材料として重用されている。これもフィリピンの重要な輸出品の一つとされている。

タバコはルソン島につくられ本島産業の一つとされている。

コプラ、明るい太陽の下にココヤシがよく茂っている。気候風土がココヤシの栽培に適しているからである。ヤシの木は建物の材料として用いられるし、新しい芽は野菜代用として、その葉は籠、ザル編物等に用いられ非常に用途が広い。又ヤシの実の頭位あり透明であるが生くさい特異臭が鼻についてコップ半分も飲みきれない。しかし一度なれるとその味が特別なものとなるらしい。ヤシの実の内側に白い 4~5 分の厚さの果肉がくっついている。これがコプラでこのコプラを搾ると油がとれる。これがヤシ油であり食用とされる。又コプラは化学工業の大切な原料となる。花が咲きかけたときその端を傷つけそれから流れでる其の液を醗酵させてヤシ酒をつくる。他の南国の国々と同じようにお祭りにはこのヤシ酒を飲んでお祝いする。フィリピンは勿論東南アジアではヤシと生活とが密接不離な関係がある。ヤシの一種にサゴヤシというのがある。これは成熟した茎にサゴ粉という澱粉が入っている。これがこの地帯のたいせつな食料ともなっている。

フィリピンは地形が複雑で気候も種々変って雨の多い所とか雨季と乾季のはっきりと別れている地帯ができているので作物が異ったものができる。



『マニラ』。フィリピンの首都で波おだやかなマニラ湾に抱かれ強い日光に照されて海の色は美しい。キャビテ軍港がマニラ市を護るかのようになっている。マニラの入口には曾つての戦禍の地であり死の行進のバターン半島コレヒドール等がある。市街は整然とし赤尾根の麗しい家が建てられている。道路はすばらしく立派であり、自動車は右側通行で強い南国の光線にマッチするように黄、赤等で色どられている。マニラの夕映は世界的である。西の空が紅にもえたち海にえいじ美観を呈する。又海岸のヤシの並木も一しおの風情である。

マニラ人は日本人に似て見え坊であり家ではつつましく外では身分以上のふるまいをするらしい。スペイン、アメリカの影響を多分にうけて服装、建物は洋風化しておるが主食は米である。米の煮方が違うのかサラサラして小米を煮たようでねばりが無い。これにどす黒い醤油と、かんきつの汁をかけて食べる。鶏の煮方、えびの天ぷら等は日本と変わらない。マニラでうまいと思ったのは水である。マニラの水は日本の水のうまさがあった。日本の醤油はマニラの人にもうまいのか船にきてキッコーマンキッコーマンと、とてもほしがる。衣類も輸入によると見え下衣類からタオルの類まで彼等にはほしいものの主なものである。一般に物価は日本より高い。

「ホセ・リザール」。市内の公園にリザールの像がたてられている。又大統領官邸にも彼の像がかざられている。フィリピン人にとってリザールは憂国者として独立運動の恩人として崇敬のままとされている。彼リザールは医学を修め、ヨーロッパに学び、スペインの圧政に苦しむフィリピン人を救わんと祖国の姿を小説に描き出版し政府の反省をうながし、フィリピン人の心をゆさぶりおこした。その後黄熱病患者を救わんとして出発途中無実の罪をきせられ 35 才の若さでルネタ公園の現在の碑のたてられている場所で銃殺されたといわれる。誰か死の前に歌った詩は今なおフィリピン人の血の中を流れており強い祖国愛の歌としてフィリピン人をふるいたたせている。

第2次世界大戦後いち早く立ちあがって独立したのがフィリピンであるがまだ国が若く財政的には華僑の力が可なり強いようである。日本との関係も戦時中の日本軍政の圧力が今尚溝となって残っている。田舎に入る程その悲しい溝が深いといわれる。日本とフィリピンが心から手を握ってゆける日はなお相当の日数がかかるであろうが両国のため一日もその日の早かれと願って止まない。